

よくざとられたい、教育の價値はどこにあるやといふこともよくしつてほしい、年はうつつて、國ありてためしなき新年は來ました、軍國多事のさい一層斯道のためにつくされ以て完全なる國民をつくられたるので、それには少年時代が最もゆるかせにすべからざるときで御座いますから、進んで小兒教育のためうでをふるつていたゞきたいのであります

(未完)

### 若菜籠

其子

▲我が古郷に狂句などに長じたる男ありけり。年の始の朝の宮參りの道に、友なる神官に出遭ひて「先づ御慶、去年のはらひは如何にぞや」と問ひしに、神官即座に袖かさ合はせて、

「はらへどつもるかり衣の雪」

五十

と答へたりしこそ、可笑しかりしか

▲これも、全じ所にての話なり。さる婦人、夢に珊瑚の玉の二つに割れたりとみて、詮なき夢を見たるものかなと、兎角に思ひ煩へるを聞きて、ある人

さんごじゆで、二つにわれれば七つ半

七福神より半分上なり

と咏みて興へければ、此上なく喜びて、心を安んじたりといふ。

▲我が妻をよぶに愚妻といふ。之を英語に譯して my foolish wife といはゞ、如何ばかり、可笑しからん、我が子をよびて愚息、豚兒などいふも同様なるべし。

▲妻持てる男の、或日訪ひ來りて、こま／＼しき

まで女の缺點を指し示し給ひて、得たり顔なりければ、それは奥様につきての御經驗談とこそ承はれ、他人につきてはとでもさる細き御觀察をせられ給ふ機會在すまじければと答へしに、其人苦笑して、其後は何も仰せられずなりぬと、我友の語られしこそ、可笑しかりしか。

男の馬鹿ならぬ限りは、女は涙を以てにわらざれば命令する能はず。 "Woman can not command man, unless he is fool, but with tears." 涙なき婦人は、所詮男を服すること能はずの意か、さるにても、頑固なるは男の心にもあるかな。

▲浅ましきもの、フロツクコートいかめしく装へる紳士の、いたく酔ひしれたるにやわらん、片手に折り詰をぶら下げ、片手に楊子などくわへたるまゝ、足許も危げに歩み出でたる、女の聲高らかに、

に、取り亂して物などうち争ふ氣はひの聞ゆる、蝦茶袴はきたる少き女の汽車などにて、若き男と笑ひ戯るゝを見たる、さる運動會に行きし折、樂隊の進行曲の中に、俗曲春雨のうち交りて奏せらるゝを聞きたる、さては 我が夫などと過さにし年學びの窓を共にしたりける學友の、見る蔭もなく落魄して、聊かの惠に預らんなど言ひて訪ひ來りしこそ、いみしう、浅ましくも感ぜられしか。

▲一年、白粉のこと、かしましく論らはれしことありしが、相當に容儀をつくらふことも亦女の一の嗜とこそ教へられたれ。さりながら夫持る人の、外に出る時はかり、外見を飾りて、家にてはひたすら、取り亂し居るは、本末顛倒とやいはん、女は己を愛する者の爲めにかたちつくとぞいへるなるに。

▲めかし過るはもとより宜しからず、さりとして、

みつたれたるも賞むべきにはあらず。男と女とを問

はず、相當に容儀をつくらふは、禮義として必要

なり、教育の任に當れるものに在りては尙さら。

▲家庭教育と申すこと、近來いみしく八釜しくな

り侍り、但し、それが原理や方法につきてのみ云爲

する丈では實蹟の擧らん由もなし。要は、父母の

模範に在り、一見は百聞にまさる、母蟹、其子に

まっすく歩まんことを口を酸くして教へしに、一度、

其子に、さらば、先づ、お母さんから歩いて見せ

て頂戴なりといはれて遂に之に應ずること能はさ

りしといふ故事さへ侍り。

▲賢母一人教師百人に勝るとは、西洋に名高き教

育者の言葉なり。さらば、女教師となりて百人前

の力を盡さんよりは、賢母として一人前の務めを

なさんかな。

▲近頃の學者の、妻を選むに徒らに年の少きと面

の美なるを以てするは誤りたらずやと、さる教育

ある婦人は申されき、げにく、高き教育を受け

たる處女の、高位高官をのみ婚嫁の目的とするに

劣らぬ非事なりとやいはし。

▲高慢なる人は、心になる程と思ふ説を聞かても、

態と鼻であしらふ態度を取るものなり。

▲名譽の語は美なり、而も職責といふ語は一層美

なり。"Glory is a good word but Duty is a bet-

ter one" とは合衆國現大統領の名言として傳へら

る。

▲よき程に年とりたる人の、年頃なる我子に妻を

求めさせんとせるが在せり。一日、新に妻取れる

人に向ひて、「兎角老人なき家にては、嫁の氣儘に

なり易ければ、老人も、一家には必要の道具に侍り」と申されけるに、其人、「げに左もこそ候はめ、宅にては老人在さぬ故、妻は存せらるゝ如く氣儘に候」と答へけるに老人、狼狽て、「いや、貴所のは、例外に候ものを」と申されけり。人を見て物は言ふべきにこそ。

▲或人前つ頃、外國留學より歸朝せし人の許を音つれしに、不圖、玄關の正面に、面會日何曜日と筆太に記されたるを見て、さては今日は面會は許されぬにこそと、そこへ歸りて、知人に其由を語りしに「まこと彼の人こそ新らしき國の知識を得て、故き國の常識を忘れたりける」と語られたりと、

書 烹

石井泰次郎

春の菓子として、古きを賞味する爲に拵ふる山椒餅のつくり方

原料 上新粉 砂糖 百匁

砂糖 シホンピキ 百匁  
又ハ三盃

山椒粉

水

上新粉を、皿の大きなるに入れて、水を少しづゝ加へて、手にてでつちて、次第によく水を合せて、漸くかたまりになる程にこねて、一かたまりとして、團子一粒ほどの量にちぎりて、蒸籠の内に入れ（蒸籠は簀の上に布巾を敷て、其上に、ちぎりたるを並べ入るゝなり）布巾を以て蒸籠の上よりおほひて、又其上に木蓋をして